報告

台湾で生まれた日本語

井竿富雄

はじめに

筆者は「地域実習」ならびに「プロジェクト演習」担当者として「台湾と山口のつながりを考える」という海外に渡航するタイプのプロジェクトを行ってきた。日本政治史を主として研究してきた筆者にとって台湾は直接の研究対象となってはいなかった。ただ、国際文化学部がこれまでアジア諸国、とりわけ東アジアの漢字文化圏に関心を持って来たこともあり、個人的に台湾の文化などには関心があった。二〇一五年に防府市立図書館倉庫で、台湾の画家陳澄波（一八九五―一九四七）の作品『東台湾臨海道路』が発見された。この発見者であった児玉識（元龍谷大学教授）、そして元来の台湾実習担当者であった安渓遊地（本学名誉教授）という二人の学者に誘われつつ、最初は「台湾大学での国分直一文書整理補助・立石鐵臣『回覧雑誌』文字起こし補助」という事業と合わせた形で筆者も台湾をめぐる地域実習科目と関わることになった。

さらにそこに、安渓名誉教授がもう一つ大きな課題を持ち込んだ。「陳澄波の自筆ノート」である。陳澄波が青年時代に大量に書き写した日本語の文章（内容も領域も実に幅広い）や、東京美術学校時代に学生陳澄波が哲学の講義を聴講してとったノート、また一九三四年に開催された帝展（陳澄波も入選していた）を実際に参観し、入選作品を実見して一つ一つにコメントを付したノートが遺されていた。安渓名誉教授（作文帳）のほか、筆者（帝展ノート）や、吉永敦征准教授（哲学ノート）も加わり、文字起こしをしてその背景や意味を考えるという作業を数年かけて行った。この成果は後に文字起こしとともに『陳澄波全集』に収録されることになった。[1]

このような中で、筆者は「台湾で生まれた日本語」に今更ながら関心を抱いた。以前にも筆者は、植民地で生まれた日本語文学について文章を書いたことがある。[2] そこからの問題意識の継続とも言い得る。もとより、日本帝国が植民地において、伊沢修二の渡台を皮切りにして、住民に日本語を学ばせた以上、宗主国側が期待しなくても日本語が流暢な現地住民が出てくることは当然の結果である。[3] そして、台湾住民の中から、日本語で創作活動をする者も現れてくることになった。これも当然あり得る。言語に熟達したものが、その言語を用いて自らの考えや感覚を表現したりしようとすることは人間として当然の行為である。陳澄波は画家であるから文章を主とはしていない。しかし陳澄波も日本語による文章をいくつか遺している。[4] 最も衝撃的なものは、陳澄波が一九四七年、二・二八事件で反乱の扇動者という無実の罪により処刑される寸前に家族に対して遺した遺書のうちいくつかが日本語で記されていたことであった。国家権力によって暴力的に生命が断ち切られるという瞬間に出る言葉が日本語によるものであった（陳澄波には中国語の遺書も残されている）ということは、陳澄波の「母語」として、中国語、台湾語（マジョリティの言語であるホーロー語）と並んで日本語があった、ということでもある。

その後、「地域実習」、カリキュラム改正による名称変更で「プロジェクト演習」となった筆者のプログラムでは、台湾嘉義の国立中正大學に行くことが加わった。ここでは台湾文学および創意応用研究所（大学院に相当する）との交流がもたれ、地域の文化資源をどのように地域振興に生かしていくか、という、国境を超えた問題意識のもとにある研究成果を示されることがあった。[5]

このような中で、筆者の関心事に、日本統治時代の台湾文化、ということが出てきた。植民地時代において台湾の人々によってなされた文化的活動の成果や意義をどうにかして学生に伝えられないか、ということである。陳澄波の絵画が防府に来た理由は、依頼者の元台湾総督上山満之進が防府出身だったことである。上山は自身の没後、蔵書などをすべて自身の寄附で設立する防府市立

図書館に寄贈した。そして、上山満之進が陳澄波に絵を依頼し、作品が描かれた時代は一九三〇年前後であった。一九三〇年とは原住民族の大規模な反乱事件である霧社事件が勃発した年である。そしてその翌年、嘉義農林学校が編成した民族混成野球チームが日本の中等学校野球選手権大会で準優勝した。[6] 日本の台湾統治が民族を超えて浸透していることと、根強い抵抗が続いていることが続けざまに現れた時代であった。そしてこのような時代の中で、台湾現地住民の手による文学作品が、宗主国の言語である日本語で現れることになった。

いささか長すぎる前置きから「はじめに」を記したのは、今回の小文が出てくる動機としての説明をするためである。今回筆者は、二〇二四年に刊行された日本統治期台湾日本語文学作品集『パパイヤのある街』[7]を紹介しつつ、この小説集に収録された作品の持つ意味なども事前事後教育に入れられないか考察した過程を記している。植民地統治が、統治を円滑に行うために住民に押し付けた言語が、人々によって自身の心情や苦悩を表現し、場合によっては政治経済体制に対する抵抗を表現する手段として用いられることになったのである。中には植民地統治終了後にも自身を表現する手段として日本語を用いた人もあった。

植民地時代の日本語文学作品集は、これまでにも膨大な巻数を持つ史料集的な価値を持つものが出ている。[8] ただ、これらは巻数が多く非常に高額で、個人で購入できるようなものではなく、収蔵している図書館も限られている（残念ながら今回筆者も見ることがかなわなかった）。以前、黒川創氏が、「〈外地〉の日本語文学選」と題した選集を刊行したことがある。この中には台湾で生まれた日本語作品を収録した巻が[9]あり、筆者はこの書籍によって、台湾で生まれた日本語小説に初めて触れた。今回出た本書のような、個人でなんとか購入して手軽に読める量の作品集が刊行されたのは黒川氏の作品集以来ではないかと考えられる。これらの作品が、植民地で生まれた、宗主国の言語を用いて創作された作品であるだけでなく、宗主国の統治方針をより先鋭化した形で表してくることもあったりするのである。

なお、筆者は文学の研究者ではなく、文学史についても全く知るところがない。そのため、個別の作品がもつ文学的・文学史的意義については論ずることができない。文学的・文学史的意義については、今回取り上げる作品集に付された編者山口守氏の詳細な解説文や、台湾の研究者陳芳明氏の著した『台湾新文学史』の邦訳[10]などを参照されたい。

一　収録作品とその内容

本書に収録されているのは、以下の作品である。収録の目次順に並べる。

呉濁流「自然にかえれ！」
楊逵「新聞配達夫」
翁鬧「夜明け前の恋物語」
龍瑛宗「パパイヤのある街」
呂赫若「牛車」
周金波「志願兵」
楊千鶴「花咲く季節」

本書に収録されたものは、内容も性格もさまざまな領域に広がる作品群である。それぞれの作品と、関連した事項など、読解に必要であると考えられる事項を記していくことにしたい。ただし、紹介は収録順とはやや異なる。

呉濁流「自然にかえれ！」は、猫の一人語り形式で描かれた小説である。明らかに夏目漱石の『吾輩は猫である』をもとにして書かれたものである。教師の家に飼われた猫が人間世界を観察し、最後に飼い猫の立場を放棄する。「人間って総べて道徳や宗教と云う仮面をかぶっただけで、その道徳も弱者に強いる道具としてしか使わない」という一文は示唆的である。呉濁流は長篇小説『アジアの孤児』が現在でも読むことができる作品として存在する。[11] 植民地時代末期から日本語での創作活動を行い、第二次世界大戦後、台湾を統治した国民党政権が日本語での出版活動を禁じた後、中国語での創作活動に転じた。筆者は、台湾に戦後すぐ来た国民党政権関係者が水道を知らなかったというアネクドートが呉濁流の短編「ポツダム科長」に出てくることを講義科目で紹介したことがある。

翁鬧「夜明け前の恋物語」は、その名の通り恋愛に関する一人語りの形式で書かれた小説である。恋愛する、あるいはしたい若者の懊悩がなまなましく描

かれている作品である。翁鬧は台湾において日本語で創作活動を行った草創期の人物であると言われている。この人物の作品としては、台湾でも中編小説「港のある街」が近年発掘され、日中対訳版という形で刊行された。[12] この小説は、神戸を舞台にして、孤児として育った女性、犯罪者から改心して宗教家となった人物、取り締まる対象と気脈を通じた悪徳刑事などの織りなすハッピーエンドなドラマとして作られている。翁鬧は若くして東京で病死し、その創作期間はわずか二年ほどであった。

楊逵「新聞配達夫」は、プロレタリア文学作品として書かれたものである。台湾出身の若者が住み込みの新聞配達員になり、あまりにも理不尽な労働環境を経験し、労働条件の改善目指して闘っていく日本人を知ることになる。主人公の若者は、サトウキビ農場を作ろうとしている日本企業に強制的に農地を買いたたかれてしまった台湾農民の子として設定されている。日本による台湾植民地経営の一環であるサトウキビ栽培の拡大がもたらした人々の境遇の激変と、日本国内での労働問題がリンクされている。作者である楊逵自身も社会主義運動などに関わり、この後植民地統治が終焉してもなお、筆禍で投獄されたりする数奇な人生を送った。現在の台湾では国立台湾文学館の手によって全集が編纂されている。

呂赫若「牛車」も、このような近代化に乗り遅れてしまった台湾の地方住民が主人公である。牛車を使って運送業をやっていた主人公は、道路が近代化で拡張され、自動車などが運送手段として入り込んできたことにより急速に没落していった。現金収入の道が絶たれていく中で、ついに主人公は自分の妻に売春させて金を稼がせる、ということまで手を染めるに至った。しかしそのような生活の中で、主人公は交通規則違反を理由として警察官に検挙され高額の罰金を課せられる、というさらなる重圧がやって来るのだった。主人公の一家が貧困のスパイラルに捕らえられ転落していく様子がやりきれないほどの重圧感で描かれている。この作者呂赫若については、二〇二四年に新発見された日本語小説などが中日対訳版で刊行された。[13] また、戦時下（一九四二年から一九四四年まで）日本語で記された日記の影印版も刊行されている。[14] 二〇二四年に発見された作品「季節図鑑」は、新聞の連載小説だった。これは「牛車」のような重い背景を持つものとは異なり、一組の男女が出会う話である。主人公は台湾から東京に来て学んでいたが、台湾と日本のルーツを持つ女性と出逢い将来を約す。この思いは、台湾に帰郷して、実家の用意した見合いを断るほど真剣なものであった。ところが女性の側には、その職業に対する男性の実家からの忌避感とともに、台湾人である父について、氏名以外一切不明である、という問題があった。女性はこの父の存在を探すために台湾へ向かい、各所を訪ねていくうちに意外な展開を見せていく、というようになっている。呂赫若自身は日本に留学した経験があり、小説だけでなく、演劇や音楽にも才能を見せた人物であった。しかし第二次世界大戦後、一九四七年の二・二八事件に巻き込まれて失踪し、未だに没年が不詳という不気味な人生の結末に至る人物でもある。[15]

「牛車」作中で「大人（たいじん）」と呼ばれる日本人警察官が、台湾社会の末端において恐るべき権力者として君臨していた[16]ことは、この拙稿を記す際に確認した、近代台湾の高名な作家賴和の「秤」という作品でも見られる。貧しい農民が、作った野菜を市場で売るために隣人から秤を借りていく。ところが日本人警察官はこの秤が不正確であるといいがかりをつけて秤をへし折り、さらに高額の罰金を課して支払うことのできない主人公を投獄してしまう。主人公の妻は、夫を釈放してもらうために新年を迎える資金として借りた金をはたかなければならなかった。その後、街では警察官が殺害された（と同時に主人公が自殺したことも暗示される）、という話が拡がっていったという結末である。[17] 賴和は医師であり、日本語による教育を受けていたはずであるが、日本語による創作はしなかったといわれる。

龍瑛宗「パパイヤのある街」は、植民地統治を受容しながら生きようとする台湾人青年の苦悩と挫折を描いたものである。この作品と、前述の「新聞配達夫」は日本の雑誌に掲載されたことで知られている。主人公は旧制中学を卒業（この人物がきわめて優秀な日本語の使い手であるように設定されている）して役場に勤務し、働きながら学んでさらに上級の文官試験を突破しようとしている。最終目標は日本人女性と結婚して日本の戸籍に入り、日本人になり切ることだった。そうやって、日本人からの差別的な視線を逃れようとしていたのである。

ところが、周囲は主人公の努力に冷淡である。それどころか、むしろ積極的に足を引っ張るのであった。企業に勤める社会人になった台湾人の同級生は、主人公の志望を批判した。主人公が、もし社会的上昇ができなくても勉学

によって知識を獲得し人格を陶冶することは意味がある、と語ったことに対し「おお、その智識を犬に喰われろだ。智識は君の生活を不幸にするであろう。君が現実にぶつかる場合、その智識は反って君の幸福の桎梏となるであろう」と冷水を浴びせた。台湾人の上司は「私は社会の不幸の原因を常に知識の過剰にあると思うですな」とこれ見よがしに語った。主人公が恋愛感情を抱いた女性は、その父(同僚で、主人公はこの人物の自宅の一部を借りて住んでいる)に人身売買のような形で財産家の息子と結婚させられて去った。このような中で主人公は「この街の空気が恐ろしい。腐った果物のようになる。青年はデスペレートな沼地に彷徨うている」とつぶやく。ただ一人学問の世界の探究に道を見出していた若者(前述の同僚の息子)は結核で短い人生を終えていった。主人公はその若者による「二十三の歳月は短かいかも知れない。／しかし僕の肉体は儚かったが、僕の精神は五十も六十も暮した。／僕は深い思惟と真の知識によって物事を解釈するを得た」という文章を含む遺稿を読んだ。そしてついに主人公は努力を放棄し酒に耽溺していくのだった。一九三〇年代の台湾青年が持つ閉塞感を暗い筆致で描いた作品は、同時代の台湾でも「台湾を悪く描き過ぎる」と批判されていたらしい。[18] この作品においては、植民地統治よりは、台湾の伝統的社会の側にある問題点が主人公を追い込むような描き方になっている。龍瑛宗はこの作品で作家デビューし、銀行勤務や新聞社勤務をしながら小説を書いた。第二次世界大戦後、中華民国政府のもとで日本語での出版活動が禁止されたため銀行勤めに戻り、定年後中国語作家として再デビューした。[19] 二〇〇八年に龍瑛宗の全集が台湾で刊行されたが、日本語作品だけを集めた日本語版の全集と、日本語作品を中国語訳し、中国語作品を加えた中国語版の二種類が出ている。[20]

現代台湾において、この「パパイヤのある街」と、前述の頼和「秤」が、マンガに作り直されて出版されたことを知った。[21] 小説とストーリー展開が一部変えられているが、その暗く重たい雰囲気がよく出ているものであった。黒川創氏の編集した前述作品集では、龍瑛宗の「邂逅」という作品が取り上げられている。これでは、デビューして間がない小説家(自身を模しているといわれる)と、文学にはさほどの価値を見出さない地元の名士が旅の途中で出会って会話を交わしていく様子が描かれている。主人公の小説家のおどおどした様子が印象的な作品である。

周金波「志願兵」は、第二次世界大戦下で台湾人にも徹底的な戦時協力が求められていき、そのために日本への同化を強いる状況下での作品である。そして、この「志願兵」は、それを徹底して推し進める立場から書かれているものである。

この小説では、三人の台湾人青年が主たる登場人物である。一人は語り手の「私」(この人物も東京で学んで帰郷している)、一人は東京の大学を出て台湾に戻って来たばかりの若者、そして三人目は二人目の若者の同級生である。この三人が、戦時下の台湾で何を語るかといえば「どうやって日本人になり切るか」ということであった。高進六という三人目の青年は、学歴はさきの二人ほど高くないが、在台日本人の精神修養団体に加わり、創氏改名もしているのであった。ところが東京から帰った若者は、この人物の主張を「神がかり的」と批判し、激しい論争になる。その若者からすればこういうことだった。「僕は日本に生れた。僕は日本の教育で大きくなった。僕は日本語以外に話しができない。僕は日本の仮名文字を使わなければ手紙が書けない。だから日本人にならなければ僕は生きたって仕様がないんだ」。

このような状況が変わったのは、三人目の青年高進六が、血書を作って日本軍に志願したことが報じられたからである。二人目の青年は「進六こそ台湾のために台湾を動かす人間だ。僕はやはり無力な、台湾のためには何にもならない人間なんだ」と自らの負けを認めたのである。一九四〇年代に入り、台湾でも急速な皇民化政策が行われ、日本語の常用、日本的な名前への改姓名、そして神道の普及が行われた。[22] 以上のような環境を、どうにもならない所与のものとしてだけ受け止めるのではなく、積極的に誇る方向へ進めることが意図されている。このような小説を書いたため周金波は「皇民作家」と呼ばれることになった。第二次世界大戦期、日本の戦時体制を称揚するような作品を書いた台湾人作家もいたのである。一九四五年の日本敗戦後は完全に断筆し、歯科医師として後半生を送ったという。周金波の日本語作品は、日本でも編纂され刊行されている。[23]

楊千鶴「花咲く季節」は、一転して台北の高等女学校に通う若い女性達を描いたものである。卒業後の仕事や結婚などの話をしながら、それぞれが各々の人生を歩んでいく様子が語られる。この小説は二〇二三年に台湾でも刊行されているが、わざと日本語原文に加えて英語、中国語、台湾語の漢字表記、漢字

なしの完全ローマ字表記というバージョンを付け加えたものである。[24] 楊自身にも『人生のプリズム』という日本語で書かれた自伝がある。[25] 同時代的には、作家というよりはジャーナリストとしての活動をしていたようである。

以上のような諸作品が『パパイヤのある街』には収録されていた。日本時代の台湾で日本語による文学作品が生まれたのは、事実として存在する。これらの作品を見ると、時代によって扱われているテーマも多様であり、時代によってはプロレタリア文学に入るような作品が書かれ、日本時代末期、すなわち敗戦前夜には強烈な同化を志向する作品が書かれている、ということもわかる。次節では、筆者はどのようにこれらの作品群を受け止め、実習科目などの教育に入れ込んでいけばよいのか、ということを考えたことについて記したい。

二　台湾生まれの日本語をどう受け取るか

二〇二四年の台湾実習では、陳澄波文化基金会の方が、筆者や学生を陳澄波の作品にまつわる場所に一日かけて案内する、というフィールドワークを組んでくれた。陳澄波の絵画に描かれた場所がどうなっているかを案内し、陳澄波の旧居を訪ね、嘉義の町に残る日本時代の建築物がリノベーションされていることなども目の当たりにした。

そして、この時筆者は絵に描かれた嘉義の廟に入った際、日本語の和歌が描かれた額が奉納されていることに気づいた（図１）。「しきしまのやまとごころをひととはばあさひにほふやまざくらばな」（左）と「やまはさけうみはあせなむよなりともきみにふたごころわれあらめやも」（右）である。前者は本居宣長、後者は源実朝の作品である。日本に対する強烈な愛国心と尊皇心をあらわす短歌の額が、台湾の伝統的な宗教施設に奉納されていた。明らかに日本統治時代に組み込まれたものである（暗くて字が小さく、奉納者が台湾人なのか日本人なのかがよくわからなかった）。

筆者は事前学習において日本統治時代について十分に説明をしていなかった。そのため、学生にこの額の存在を指し示したが、学生は十分に意味のあるところをつかみ取ることができていたかどうか知ることができなかった。この額がいつ奉納されたものかは不明であるが、日本統治と台湾の伝統的な宗教信仰が矛盾しないことを示すためのものであったのだろうか。それが「愛国・尊皇の和歌を日本語で示す」ことであったことは重要な意味を持っている。日本語は強力な権力を背景にした言葉として台湾に入って来た、ということである。

図１　嘉義の廟にあった和歌の額

また、台湾では日本語が戦後も各方面で長期間生きていたことが知られている。台湾では日本時代生まれの人々の間で日本語を使った文学活動が行われた。俳句や短歌が詠まれていた。黄霊芝という作家は日本語による小説や短歌・俳句を書き続けてきた。しかし台湾で日本語による作品を公表するメディアはないため、自費出版で作品集を刊行していたのである。[26] 他にも、台湾に日本のマンガ文化を普及させた人物である蔡焜燦の伝記マンガ『台湾の少年』（全四巻）を見ると、戦後の台湾では「中国語・台湾語・日本語」という言語が併存することになったことがわかる。[27]

とはいえそれは、親日的な姿勢とは異なる。前節で紹介した周金波の小説で、登場人物が「自分は日本語でしか表現ができない」というシーンがあった。戦後日本語で俳句や短歌を書き続けた台湾の人々にとっては、「日本・日本語が好きだから」ではなく、感情や心の動きを自分の考えるように表現できるのが日本語だったということだったのである。この点を戦後の日本人は理解できず、結果としてすれ違いから対立に至ることもあった。[28]

台湾と日本とのつながりを学ぶ、ということは、上記のようなことまでを伝えられるような事前事後学習をしていく必要があるのだが、筆者にはそのようなことができていない。

小括

筆者が担当してきた台湾地域実習・プロジェクト演習は、陳澄波の絵が台湾でなく東京でなく山口にあったことを通して、台湾と山口のつながりを学んでいく、というものであった。このことをよりリアルに感じてもらうために、筆者は何か方法がないものかと考えてきた。無論、外部講師の方が[29]説明して下さることを通して、かなりの事前知識が入り、これによってわかることも多い。ただ、もう少し学生自身が何かを読んだり見たりして、マテリアルを通じて何かを考えたりすることができないものか、ということは常に考えるところであった。さらにいうと、筆者は中国語も台湾語も解さず、学生も必ずしも中国語を学ぶものとは限らない。むしろ中国語を学ぶものが少ない、ということもよくあった。このような場合、通訳がつかなければ現地での説明文などを読むこともかなわない。ガイドしてくれる人が英語か日本語に訳さなければどうにもならないのである。そこに出てきたのが、台湾で生まれた日本語だった。

台湾で生まれた日本語を読んでいくという作業を筆者は事前学習で一度試してみたことがあったが、あまりに難しくて失敗した。学生にとっては、言葉が難しいのと、背景がよくわからないことが理由である。今回刊行された小説集のような、丁寧な解説を付していくことに加えて、リアルな背景説明が必要なのである。しかも台湾で生まれ、はぐくまれた日本語は、戦後日本と異なる歴史をもって生きているため、われわれに容易に理解しえないものをもっているということも考えておかなければならない。それは例えば、台湾大学在学中に共産主義運動への関与で逮捕され政治犯として流刑に処せられた経験を有する医師顔世鴻が、あえて中国語と日本語で自身の獄中生活を記していること[30]へどう向き合うか、ということである。この手記で顔は、「東京(裁判—筆者注)の判決はニュルンベルクの判決と比べて公平ではなかった」と書きつつも「私は歴史の上で殊に現代史では日本の行為に好感を持たない」とも明言している。加えて、「はじめに」で書いたこととも重なるのだが、一台湾知識人が回想録の末尾に日本語で以下のように記したことにどう直面するか、というレベルにまで探究を進めることができなければならないであろう。

「日本の敗戦と中国の勝利、そして台湾の光復は我々に主観的にも客観的にも非常に深刻な影響を与へ、それは今日も亦継続中である」[31]

この一文を記した医師葉盛吉は、上述の顔世鴻を共産主義運動に引き入れたことを罪とされて中華民国政府に逮捕され、この文章を書いた一か月後に処刑された。刑死に直面して自身の半生を回顧した回顧録が中国語でなく、日本語で書かれた意味は、台湾と日本のかかわりを学ぶにあたり決して軽視してはならないと考えている。

注

（1）『陳澄波全集』一一巻、陳澄波文化基金会・藝術家出版社刊行、台北、二〇二二年。陳澄波の遺書は全集一四巻（二〇二〇年刊行）に掲載されている。また、途中経過については安渓遊地・井竿富雄・吉永敦征編著『上山満之進と陳澄波』山口県立大学、二〇一七年に収録されている。

（2）拙稿「境界線の上の日本語」山口県立大学国際文化学部編『星座としての国際文化学』青山社、二〇一三年所収。台湾だけではなく、植民地朝鮮の作家たちも取り上げた。

（3）この「伊沢修二の渡台」こそ、日本語教育が始められたきっかけであることは銘記されるべきことである。日本語教育は植民地統治とともにやってきたのである。

（4）顔娟英、鶴田武良訳『風景心境』雄獅美術、台北、二〇〇一年は、日本統治時代、美術に関する日本語で公表された文章の原文と中国語訳が収録されている。陳澄波の書いたものもある。筆者が文字起こしなどを行った「一九三四年の帝展ノート」は、どこかのメディアに掲載された文章の下書きだったようである。

（5）二〇二四年の中正大學訪問では、大学附近のあまり注目されていなかった場所を空撮してその風景がもつ美に気づいてもらう、というプロジェクトの成果を参観した。また、日本時代に建設した給水塔が残っている地域で、この地域の文学作品をもとにして（あるいは新たに創作して）、ここから新たな文化的成果を発信しようとする試みを見学した。

（6）日本では二〇一四年の映画『ＫＡＮＯ』で強烈に印象付けられている。ただし、同じ監督の手で霧社事件の映画『セデック・バレ』が作られたことを忘れるべきではない。どちらかをなかったことにはできないのである。

（7）山口守編『パパイヤのある街』皓星社、二〇二四年。

（8）『日本植民地文学精選集』ゆまに書房、二〇〇一―二〇〇二年。『日本統治期台湾文学集成』緑蔭書房、二〇〇二年―二〇〇七年。前者は四七巻（うち、台湾関係のもので一四巻）もある。

（9）黒川創編『〈外地〉の日本語文学選』第一巻、新宿書房、一九九六年。「南方・南洋・台湾」というくくりで集められている。

（10）陳芳明、下村作次郎・野間信幸・三木直大・垂水千恵・池上貞子訳『台湾新文学史』東方書店、二〇一五年（全二巻）。防府市立図書館に所蔵されたものを用いた。筆者も購入したはずだがなぜか見つからない。

（11）二〇二二年、岩波現代文庫に収録されている。

（12）翁闊作、杉森藍訳『有港口的街市』晨星出版、台中、二〇〇九年。惜しむらくは、この本の日本語部分は誤植が多い。中でも目につくのは「くりかえし」を表す記号をひらがなの「く」にしてしまっていることである。この本は横書きで記されているので間違いがどうしても目立ってしまう。現代台湾にとっては古い時代の外国語での出版であるから困難であるとはいえ、残念な印刷ミスである。

（13）『季節図鑑　呂赫若新出土作品集』国立台湾文学館、中央研究院台湾史研究所共同出版、台北、二〇二四年。小説のほか、エッセイやシューベルトの歌曲を論じた連載文も収録されている。

（14）陳萬益編・鐘瑞芳訳『呂赫若日記』国立台湾文学館、台南、二〇〇四年。日記というプライベートなものが日本語で記されるということは、呂赫若の中では日本語が既に母語となっていたことを示していると考えられる。

（15）垂水千恵『呂赫若研究』風間書房、二〇〇二年。この研究も一九四三年までの研究となっている。

（16）筆者は二〇二四年の台湾訪問の際、台北市にある「台湾新文化運動紀念館」を訪れた。ここは日本統治時代の警察署の建物がそのまま使われている。筆者が日本人であると知った紀念館のボランティアスタッフと思しき方は、すぐさま筆者を留置場と水拷問をした場所に案内した（図２）。台湾新文化運動自体が、台湾住民による自立した民族意識に基づく文化・政治運動として発展していくものであって、それは植民地統治権力と鋭く対立するものとならざるを得なかった。警察署跡にこの記念館を設置した設置者の考えがよく伝わる。

図２　水拷問をした場所

（17）頼和の「秤」は、陳逸雄編訳『台湾抗日小説選』研文出版、一九八八年に収録されている。また、謝建明「頼和小説における〈日本警察〉」『論究日本文学』（立命館大学）七三号、二〇〇〇年を読んだ。

（18）和泉司『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉』ひつじ書房、二〇一二年。

（19）ただし、発表するあてのない日本語小説を書き続けていたこともあった。

（20）陳萬益編『龍瑛宗全集』国立台湾文学館、台南、二〇〇八年。筆者は日本語版だけを持っている。初出誌紙からの影印版と、原稿からの文字起こし（発表されなかったもの）とで作られている（注一九に該当するような作品）。

（21）頼和・阮光民『一稈秤仔』前衛出版社、台北、二〇二三年。龍瑛宗・阮光民『植有木瓜樹的小鎮』前衛出版社、台北、二〇二四年。「台湾経典短篇小説図像系列」というシリーズもので、続刊されるという。マンガの作者阮光民氏は、日本でも作品が翻訳出版されている。ここで扱われている作品を見ると、台湾社会において、「日本統治

時代」をどのように理解しようとしているかがわかる。日本人警官が台湾人住民を抑圧していることが事実として描かれるように、決して全面肯定してはいないのである。

(22) ここでは平井健介『日本統治下の台湾』名古屋大学出版会、二〇二四年を使った。この本は経済史を中心としている日本統治時代の通史である。台湾でこの時期刊行されていた創氏改名マニュアルである宮田豊源・広田藤雄共編『内地式改姓名の仕方』（修訂版）台北鴻儒堂書店、一九四一年を二〇一八年に同社が復刻している。

(23) 中島利郎・黄英哲編『周金波日本語作品集』緑蔭書房、一九九八年、中島利郎・莫素微編『周金波日本語作品集第二集』緑蔭書房、二〇一三年。第二集の方には周の息子が書いた略伝が掲載されている。

(24) 楊千鶴、林智美訳『花開時節（花咲く季節）四語文新版』前衛出版社、台北、二〇二三年。

(25) 『人生のプリズム』初版は一九九三年に日本で刊行されている。筆者はこれを古書店から購入し一読したのだが、研究室移転等に伴う蔵書の大混乱で行方が分からない。今回の小論を書くにあたり、いくつかの重要文献が失われていることに気づいた。

(26) 黄霊芝については下岡友加『ポストコロニアル期台湾の日本語作家』渓水社、二〇一九年などがある。

(27) 游珮芸・周見信、倉本知明訳『台湾の少年』全四巻、岩波書店、二〇二二―二〇二三年。原作である『来自清水的孩子』慢工文化事業、台北、二〇二〇―二〇二一年も見る機会があった。日本統治時代は学校などで使われる日本語と家庭での台湾語、そこに日本支配終了後中華民国政府が持ち込んだ中国語がさらに加わるのである。日本語は公的言語から、プライベートな場でのみ使われる言語になった。原書では、日本語と台湾語の部分には中国語の訳文が付され、日本語版では、北京語を標準語、台湾語を瀬戸内地方の方言に訳している。

(28) 李哲宇「台北俳句会の成立」『跨境』一八号、二〇二四年。日本の俳句団体の台北支部だったものが独立した背景には、日本側に無意識の宗主国意識があったことを示唆している。

(29) 藤田賀久、栖來ひかりという、今日台湾を学ぶには最上級の人士が事前学習を担当してくださっていることは筆者の能力不足を補って余りある。

(30) 顔世鴻『青い緑島』一葉設計、台北、二〇二二年。中国語版の『緑島百事』は未見。本書は国立成功大學の陳梅卿名誉教授より恵投されたものであることを記す。

(31) 許雪姫・王麗蕉主編『葉盛吉獄中手稿與書信集』国家人権博物館・中央研究院台湾史研究所、新北・台北、二〇二一年。この手記は妻と、ついに見ることのなかった息子に宛てて書かれたものである。

Japanese language born in Taiwan

Izao Tomio

This study examines the Japanese language as it emerged in Taiwan, using Yamaguchi Mamoru's *The Town on Papaya, Anthology of Japanese novels written in Colonial Taiwan,* Koseisha,2024, as a reference.

As part of project exercise, the author of this study led Yamaguchi Prefectural University students to Chia-Yi, Taiwan, to learn about the historical relationship between Yamaguchi and Taiwan. Chen Cheng-Po, a famous Taiwanese artist closely related to this exercise, wrote his will in Japanese before his execution. The findings demonstrate that although the Japanese language penetrated the Taiwanese people in Japan during the colonial era, it evolved in Taiwan after World War Ⅱ. Knowledge of the Japanese Language in Taiwan requires an understanding of the historical relationship between Taiwan and Japan among YPU students.